

『麻酔科医の策略』

著:春原いずみ

ill:明神 翼

「何をしたいか、ここで言っているの？」

ずっと彼の腕を掴み、浅香は逆に彼を引き寄せた。大した力ではないが身長がある分だけ、浅香の方が有利だ。

「わ……っ」

「したいことなんて、ひとつに決まってるだろう？」

声を低めて、滴(したた)るような艶を忍ばせる。慌てて身を引こうとする青井を強く引き寄せ、彼の耳元に囁きを吹き込んだ。

「きれいな君を……思い切り汚してみたい」

目の前のかじりつきたいような青井の耳たぶが真っ赤になり、次の瞬間、彼は顔色を青ざめさせた。びっくりするような勢いで飛んできた平手打ちを素早く避けて、浅香は軽く彼を突き放す。窓に手をついて、バランスをとり、青井は浅香を睨みつけた。

「今度そんなことを言ったら……」

「石津先生に言いつける？ ねえ、君と石津先生、どんな関係なの？」

「か、関係なんか……っ」

彼の反発を許さず、ずいと迫る。

「君に留学を諦めさせたほどの人なのに、どうして、彼は君に冷たいの？」

「別に冷たくなんか……っ」

「あれが冷たくないって言うなら、何なんだろうね」

浅香は一気に彼を責め立てる。

「少なくとも、君は冷たいと感じているだろう？」

「浅香先生」

青井が少し苦しそうに言った。

「石津先生は……僕の恩師です。僕を……今の僕にしてくれた方だと思っています。だから、ここに来いと言って下さった時、すぐに……行くべきだと思いました。先生が呼んで下さるなら……」

「でも、石津先生はどうなのかな」

浅香は乾いた声で追い詰める。窓に軽く手をついて、彼の黒い瞳をのぞき込んだ。そこに映る自分の表情を見ながら。それは可愛い獲物を追い詰める猟犬の顔だ。とても……悪い顔だ。

「君の得意分野を知っていながら、それを無視しようとしている。何のために君を呼んだんだろうね」

「それは……たまたま患者の状態が……」

「青井先生、僕は君のことはまだよく知らないけど、篠川のことはよく知っている」

「篠川先生……？」

突然の名前に、一瞬青井がきょとんとした。おかしい言い方だが、急にひどく幼い顔になる。あまりの可愛らしさに、浅香は笑いそうになりながら言った。

「あれは僕の親友……っていうのは少し恥ずかしいな。長いつきあいの友人だ。あれの腕も頭もよく知っている。あれが君の発案を支持した。君の心臓バイパス手術をすべきだという発言を支持した。あれがそう言うなら、間違いはないだろう」

浅香はカンファレンス時からかけていた眼鏡をすいと外し、白衣のポケットに落とした。知的にすぎるルックスが、一瞬色めいたものになる。

「青井先生、君は自分の発言を間違ったものだと思っているのかい？ 石津先生が否定したから、あっさり引っ込めるのかい？」

「それは……っ」

青井が浅香の肩に手をかけ、押しのけようとした。しかし、その手をゆっくりと握りこんで、浅香は言葉が続ける。

「それが君？ 人に否定されれば、あっさり自分の前言を引っ込める。それが君？」

あの学会の席で、時間を延長してでも、議論を続けようとした彼の激しさがなぜ石津の前では表に出ないのか。彼は唇を噛(か)んで、言葉を飲み込んでしまうのか。

「……あなたにはわからない」

青井が低く言った。

「わかってもらおうとも思わない」

「石津先生にも？」

「うるさい……っ」

目を閉じて彼は低く叫ぶ。彼の感情が大きく揺れている。波が高くなっている。浅香は手を伸ばすと彼の頬に軽く指を掛けた。彼がはっと目を開ける前に、素早く唇を重ねる。

「……っ！」

冷たい唇。あの夜の熱い唇とは全く違う、しかし、その冷たさが逆に愛(いと)しさを感じさせる唇。食い破ろうとするよりも、暖めたくなる唇。可愛くて、仕方がなくて。愛しくて。彼の背中に腕を回して、抱き寄せようとした瞬間、浅香は思いきり突き飛ばされていた。

「おっと……っ」

今度はキスに氣をとられていた分、反応が遅れてしまった。テーブルにぶつかるぎりぎりまで身体を止めて、浅香は苦笑した。

「やっぱり若いね、青井先生」

「……ふざけるのもいい加減にして下さい……っ」

青井は怒りに震える声で言うと、浅香を押しつけて、ラウンジを出て行った。その細い背中を見送る。ドアがバタンと閉じるのを見て、浅香はくすりと笑い、すぐに真顔に戻った。

「さて……」

窓についているブラインドを閉めて、浅香はゆったりとソファに座った。コーヒーをいれようかと思ったが、どうせ一人だしと決めてやめる。

「いったい、あれはどういうことかな……」

浅香は改めて、さっきのカンファレンスの奇妙な空気を思い出す。

浅香は石津の穏やかな顔しか知らない。人格者として有名で、物静かで穏やかな人柄としか知らなかった石津の硬質で冷たい表情、声、口調。あんな石津は見たことがなかった。青井が若い分だけ感情に流されやすいのは、何となく理解できるが、石

津のキャリアから考えて、あの私情に走った個人攻撃としか思えない発言は意外すぎた。

「やっぱり……何かあるのかな……」

無意識のうちに、自分の唇を指先でたどる。

冷たかったキス。あの夜のように貪るようでなく、ただ暖めたくなるキス。

青井は浅香の中の感情を揺り動かす。いつもなら一夜のことで忘れてしまったはずの相手に。いつもなら夜が終わったら、忘れてしまったはずの相手に。その姿を見ればかまいたくなるほど執着してしまう自分が不思議だった。

「そう言えば……」

同じ相手と違うシチュエーションでキスしたのは、いったいつ以来だったかと、浅香はぼんやり考えていた。

本文 p69～74 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>